

## 「雷峰怪蹟」 試訳 (上)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/32533">http://hdl.handle.net/2297/32533</a>

# 「雷峰怪蹟」試訳（上）

丸井貴史

【『兩月物語』卷四「蛇性の姪」の粉本が『警世通言』卷二十八「白娘子永鎮雷峰塔」であることは、長澤規矩也氏や後藤丹治氏の指摘<sup>1)</sup>によって、すでに定説となつている。しかしそれまでは『西湖佳話』卷十五「雷峰怪蹟」が粉本であるとの認識が一般的であり、事実、明らかに「雷峰怪蹟」から採られたと思われる表現が、「蛇性の姪」にはある。

そういった点から見ても、「雷峰怪蹟」は決して軽視すべき作品ではないのだが、近年においては、これが検討の俎上に載せられることはほとんどない。その理由の一端はおそらく、この作品の日本語訳が整備されておらず、日本近世文学研究者にとって扱いにくいという点にある。

そのような状況を鑑みて、今回、拙いながらも「雷峰怪蹟」の日本語訳を試みることにした。翻刻をも附したのは、この作品を収める『西湖佳話』の排印本には、厳密な校勘記のあるものがほとんどないからである。本稿においては、可能な限り底本の文章を再現できるように留意した。

「雷峰怪蹟」は言うまでもなく白蛇伝の流れの中に位置づけられる作品であるが、その起源は民間伝承にまで遡り、伝説の発生時期について一概に断定することはできない。ただ、小説としての原型は『清平山堂話本』の「西湖三塔記」に求められるようである。<sup>2)</sup>そしてそれは、『警世通言』や『西湖佳話』などに小説として受容され続ける一方で、地方劇にも多く取り入れられることとなった。現存でも白蛇伝は京劇の人気演目のひとつである。白蛇伝の受容史・研究史については、中国語の文献ではあるが、潘江東氏「白蛇故事研究」（台湾学生書局、中華民国七十年）や、范金蘭氏「白蛇故事」型変研究」（萬巻楼、二〇〇三年八月）に詳しいので、そちらを参照されたい。

「雷峰怪蹟」を収める『西湖佳話』は、杭州を代表する景勝地である西湖を舞台にした短篇物語集で、その地と密接に関わる人物や伝説にまつわる作品が十六篇収められている。現存する刊本のうち、最も早い時期に成立したと見られているのは、康熙十二年（一六七三）の序文を持つ金陵王衙精刊本である。<sup>3)</sup>編者は古呉の墨浪子

なる人物であるが、伝記等については未詳。ただし、「瀟湘大師醉菩提全伝」にも「西湖墨浪子偶拈」の文字が見え、同一人物である可能性が考えられるという。

日本では、文化二年（一八〇五）に十時梅屋の『通俗西湖佳話』が刊行されている。これは『西湖佳話』の抄訳ともいべきもので、所収作品は「葛嶺仙蹟」「断桥情蹟」「岳墳忠蹟」「六橋才蹟」「三生石蹟」の五篇である。

## 【凡例】

一、底本には、北京市・首都図書館蔵の金陵王衛蔵板本を用いた。

本文は康熙十二年刊本に一致。

二、本文は原則として底本どおりに翻刻したが、以下の点に配慮した。

1. 文字は原則として日本における通行の字体に統一した。日本において用いられない漢字については、底本のままとした。
  2. 句読点や「」は私に附した。また、段落分けは私に施した。
  3. 誤字は改め、その都度注記した。
- 三、訳文は必ずしも直訳を志向しているわけではないが、可能な限り原文に忠実に、かつ内容を分かりやすく表現するよう努めた。

## 【書誌】

底本は首都図書館蔵本。十六卷八冊。

表紙

縹色の改装表紙。二五・〇×十四・七糎。

封面

「精絵設色全図／西湖佳話／金陵王衛蔵板」、欄外上辺

「今古奇観」。また、「江右三槐堂校訂古今／書籍経史特文於江南／省状元境書坊發兌」という印が押されている。

柱刻 「西湖佳話（魚尾）卷一（十六）丁付」

匡郭 四周単辺。十七・四×十三・二糎。

その他 行款九行×二十字。有界。

目録題「西湖佳話古今遺蹟」。

序は「康熙歲昭陽赤奮若孟春陝月望日古吳墨浪子題」と署名のある自序と、「湖上扶揺子識」と署名のある他序がある。また、図は「西湖全図」一幅、「十景分圖」十幅（詩や賛が附される）の他、各話一幅ずつの挿図がある。

## 【本文・訳文】

嘗思聖人之不語怪、以怪之行事近乎妄誕而不足為訓、故置之勿論。然而天地之大、何所不有？荒唐者固不足道、若事有可稽、蹟不能泯。而彰彰於西湖之上、如雷峰一塔、考其始、実為鎮怪而設、流伝至今、雷峰夕照已為西湖十景之一、則又怪而常矣。湖上之忠墳・仙嶺、既皆細述其事、以為千古快瞻。而怪怪常常、又烏可隱諱而不傾一時之欣聽哉？

かつて、聖人が怪を語らぬのは、怪異というものはほとんど妄誕で教訓とするに足らぬからだと考えていた。しかし天地は広大であり、あらゆるものがそこにはある。荒唐無稽なものもとり語るに足らぬものであるが、もしもその出来事が少しでも考え

るべきものであるならば、その痕跡が消えることはない。西湖の上はその跡を残している雷峰塔は怪異を鎮めるために建てられたもので、それが今日まで伝わって「雷峰夕照」が西湖十景のひとつとなっているのは、「怪」にしてまた「常」ともいえることである。湖上の忠墳・仙嶺についてはすでに詳しく述べられており、長く親しまれてきた。しかし、「怪」にして「常」なるものにもまた、ひとときの間、耳を傾けるべきではなからうか。

你道這雷峰塔是誰所造？ 原來宋高宗南渡時、杭州府過軍橋黑珠巷内、有一人、叫做許宣、排稱小乙。自幼兒父母双亡、依傍着姐夫李仁、現做南廓閣子庫募事官的家裏住、日間在表叔李將仕家生菓鋪中做主管。此時年纔二十二歲、人物也還算得齊整的。是年恰值清明、要往保叔塔寺裏薦祖宗、燒菴子、当晚先与姐姐說了。次日早起、買些紙馬・香燭・經幡・錢塚等物、喫了飯、換了新衣服、好鞋襪、把慧子、錢馬使条楸子包好、徑到官巷口李將仕家來道「小姪要往保叔塔追薦祖宗、乞叔叔假一日」。李將仕道「這也是你孝心、只要去去便回」。

その雷峰塔を誰が造ったかということをご存知だろうか。宋の高宗が南渡された折、杭州の過軍橋黒珠巷に許宣という名の若者がいた。彼は幼いころに両親を亡くしていたので、姉の夫で南廓閣子庫の募事官をしている李仁という人物を頼って彼の家に住み、昼間は叔父である李將仕の生菓店で番頭を務めていた。このとき年齢は二十二歳で、整った顔立ちをしていた。この年の清明節のとき、許宣は保叔塔寺へ行つて祖先の追善と焼香をしようと思ひ、その晩まず

姉にそのことを話した。そして翌朝早起きして紙馬・香燭・経幡・錢塚などを買い、食事をしてから新しい衣服を着て、よい靴下や靴を履き、菴子と錢馬を風呂敷に包み、まっすぐ官巷口の李將仕の家に行つてこう言った。「私は保叔塔に行き、祖先の追善をしようと思つています。一日のお休みをいただけませんかでしょうか」。李將仕は「孝行な心がけだ。行つて早く帰つてきなさい」と答えた。

許宣離了鋪中、出錢塘門、過石函橋、徑上保叔塔。進寺却撞着送饅頭的和尚、懺悔過疏頭、燒了菴子、到大殿上隨喜、到客堂裏喫齋。別了和尚、還想偷閑各處走走。剛走到四聖觀、不期雲生西北、霧鎖東南、早落下微微的細雨來了。初還指望他就住、不意一陣一陣、只管綿綿不絕。許宣見地下湿了、難于久待、只得脫了新鞋新襪、卷做一卷、縛在腰間、赤着脚、走出四聖堂來尋船。正東張西望、恐怕沒有、忽見一個老兒搖着一隻船、正打面前過。連忙一看、早認得是熟認的張阿公、不勝歡喜、忙叫道「張阿公、帶我到涌金門去」。那老兒搖近岸來、見是許宣、便道「小乙官、着雨了、快些上船來」。許宣は店を離れて錢塘門を出ると、石函橋を渡り、まっすぐ保叔塔に行つた。寺に入ると饅頭を送つてくれた僧に出会い、祈禱書を供え、菴子を焼き、本堂に参拝し、客間でお齋を食べた。僧と別れた後、彼は油を売つてあちこち回ることにした。四聖觀に着くとすぐ、不意に西北から雲が起り、東南の方角には霧が立ち込め、早くも細かな雨が落ちてきた。はじめはすぐやむかもしれないと期待していたのだが、はからずも雨は降り続き、いつまでもやむことはなかった。許宣は地面が濡れるのを見て、長くは

待つておられず、新しい靴と靴下を脱いで腰に巻きつけて、裸足のまま四聖観を飛び出して、船を求めのしかなかった。周囲を見回しても船はいないと思つていたところへ、一人の老人が船を漕いで前を通り過ぎるのが見えた。急いで見るとよく知っている張じいさんだということがわかつて嬉しくなり、急いで「張じいさん、私を浦金門まで連れて行つておくれ」と叫んだ。老人は岸へ近づいてきて、許宣を見て「坊っちゃん、雨に濡れなさつたね。早く船にお出でなさい」と言った。

許宣下得船、張老児揺不得十余丈水面、只聽得岸上有人叫道「塔了我們去」。許宣看時、却是一個戴孝的婦人、一個穿青的女伴、手中捧着一個包兒、要塔船。張老児看見、忙把船搖攏道「想也是上墳遇雨的了、快上船來」。那婦人同女伴上得船、便先向許宣深深道了個万福。許宣慌忙起身答禮、隨撥身半辺道「請娘子船中坐」。那婦人進艙坐定、便頻把秋波偷瞧許宣。許宣雖說為人老实、然見了此等如花似玉的美人、又帶着個俊俏的丫鬟、未免也要動情。正不好開口、不期那婦人轉先道「請問官人、高姓大名？」許宣見問、忙答道「在下姓許、名宣、排行小乙」。婦人又問道「宅上何處？」許宣道「寒舍住在過軍橋黑珠巷、舍親生藥舖內做些買賣」。說完、就乘機問道「娘子高姓、潭府那裏？」亦求見示。那婦人答道「奴家是白三班白殿直之妹、嫁了張官人、不幸亡過了、現葬在這辺。因今日清明、墳上祭掃而回、不期又值此雨。猶幸遇塔得官人之船、不至狼狽」。

許宣が船に乗り、張老人が十丈あまりも漕がないうちに、岸の上で人が「私を乗せて行つてください」と叫んでいるのが聞こえ

た。許宣が見ると、喪服を着た女性と青い服を着て荷物を持った女中がおり、船に乗りたいたいと言っている。張老人はそれを見ると急いで船を近づけて、「墓参りをなさつて雨に降られたようですね。早くお乗りなさい」と言った。その婦人は女中と船に乗り、まず許宣に向かつて深々とお辞儀をした。許宣は慌てて身を起こして答礼し、身をすくめて「どうぞ中の方へお座りください」と言った。その婦人は船の中へ進んで座り、しきりに許宣へ秋波を送っていた。許宣は生真面目な性格であつたが、この花にも玉にも似た美人を見て、しかも器量のよい少女を連れていたので、心が動くのを押さえられなかつた。口もきけずにいると、期せずして婦人が先に「お名前は何とおっしゃるのですか？」と話しかけてきた。許宣は問われて、慌てて「姓は許、名は宣と言ひまして、長男です」と答えた。婦人はまた「お宅はどちらですか？」と尋ねた。許宣は「家は過軍橋の黒珠巷にあります。親類の家の生薬店で商売をしております」と答え、言い終わると機に乗じて「奥様のお名前は何とおっしゃつて、お住まいはどちらですか？」とせひお教えください」と言った。婦人は「私は殿直である白三班の妹で、張氏に嫁ぎましたが不幸にも先立たれまして、今はこのあたりに埋葬しております。今日は清明節ですので墓参りをしまして、帰ろうとしたときにあいにくこの雨に遭つてしまったのです。幸いにもあなた様の船に乗らせていただいて、困つたことにならずに済みました」と答えた。

彼此説些閑話、不覺船已到了浦金門。将要上岸、那婦人故作忸怩

之状、叫侍尼笑对許宣說道「清早出門得急了、忘記帶得零錢在身邊。欲求官人借應了船錢、到家即奉還、決不有負」。許宣道「二位請便、這小事不打緊」。因腰間取出付了船家、各自上岸。岸雖上了、雨却不住。恐天晚了、只得要各自走路。那婦人因对許宣說道「奴家在薦橋双茶坊巷口、若不棄時、可到寒舍奉茶、並納還船錢」。許宣道「天色已晚、不能久停、改日再來奉拜罷」。說過、那婦人与侍兒便冒雨去了。

話をしていゝうちに、船は涌金門に着いた。岸に上がろうとしたとき、婦人はことさら恥じ入つた様子で連れの少女に、許宣に對して「朝早く急いで出かけましたもので、お金を忘れてきてしまいました。船の代金をお貸しいただけませんでしょうか。家に着きましたらすぐにお返しいたします」と言わせた。許宣は「お氣になさらないでください。大したことではありませんから」と言つて懐から金を取り出して船頭に支払い、それぞれ岸に上がった。しかし岸には上がったものの、雨はやまない。それでも空が暗くなつてはいけなないので、それぞれ帰らなければいけない。婦人は許宣に「私の家は薦橋の双茶坊巷口にあるのですが、もしよろしければいらつしゃつてお茶でも召し上がつていってくださいます。船代もお返しいたします」と言つた。許宣は「もう遅いので長くはお邪魔できませんから、後日また伺います」と答えた。婦人は少女と一緒に、雨の中を帰つていった。

許宣忙進涌金門、從人家檐下、挨到三橋子親睦家、借了一把傘、正撐着走出洋壩頭、忽聽得有人叫道「許官人慢走」。忙回頭看時、

却原是搭船の白娘子、獨自一人立在一个茶坊屋檐下。許宣忙驚問道「娘子如何還在此?」白娘子道「只因雨不住、鞋兒都踏湿了、因叫青兒回家去取傘和脚下、又不見來。望官人傘下略搭几步兒」。許宣道「我到家甚近。不若娘子把傘帶去、明日我自來取罷」。白娘子道「可知好哩。只是不當」。許宣遞過傘來与婦人、自去方沿人家門檐下冒雨而回。到家喫了夜飯、睡在床上、翻來覆去、想那婦人甚是有情。忽然夢去、恰与日間相見一般。正在情濃、不覺金鷄三唱、却是南柯一夢。正是

#### 心猿意馬馳千里 浪蝶狂蜂鬧五更

許宣は急いで涌金門に入り、人家の軒下を通つて三橋子の親睦の家まで行き、傘を借り、それをさして洋壩頭を出たところ、不意に誰かが「許さま、お待ちください」と呼ぶのが聞こえた。慌てて振り返ると、先ほど船で一緒になつた白娘子が一人で茶坊の軒下にたたずんでいる。許宣が驚いて「どうしてまだここにいらつしやるのですか?」と聞くと、白娘子は「雨がやまないせいで靴がすっかり濡れてしまいましたので、青青に傘と雨靴を取りに家に戻させたのですが、まだ戻つてこないのです。どうか傘に入れていっていただけませんか」と言つた。許宣が「私の家はすぐ近くです。どうぞ傘をお持ちになってください。明日、返していただきに伺います」と言うと、白娘子は「もちろん私はそれで結構ですが……申し訳ありません」と言つた。許宣は傘を婦人に手渡し、自分は人家の軒下を伝つて、雨に濡れながら帰つた。家について夕飯を食べ、眠りについた床の上で何度も寝返りを打ち、あの婦人のことを想つていた。すると夢の中に、あたか

も昼間に会つたときと同じような情景が現れた。愛情が濃やかなそのとき、不意に雄鶏が三度鳴いたが、これこそ南柯の夢である。まさに、

猿と馬は千里を駆けて 蝶々と蜂は朝まで騒ぐ<sup>15</sup>

許宣天明起来、走到鋪中。雖說做生意、却像失魂一般、東不是西不是。挨到喫過飯、便推說有事、便走了出来、遂一徑往薦橋双茶坊巷口尋問白娘子。問了半晌、並沒一人認得。正東西躊躇、忽見丫鬟青兒從東边走来。許宣見了、忙問道「姐姐、你家住在那裏？」我來取傘」。青兒道「官人我隨來」。遂引了許宣、走不多路道「這裏便是」。許宣看時、却是一所大樓房、對門就是秀王的府牆。青兒進門、便道「許官人、請裏面去坐」。許宣遂隨到中堂、青兒向內低聲叫道「娘子、許官人在此」。白娘子裏面應道「請許官人進來奉茶罷」。許宣尚遲疑不敢入去、青兒連催道「入去何妨？」

許宣は朝起きると店へ行ったが、商売をしていてもまるで魂を失つたようで、そわそわして落ち着かない。食事が終わるまで辛抱すると、用事があると言つて店を出て、まっすぐ薦橋の双茶坊巷口へ白娘子を探しに行った。しかし、白娘子の家の場所を人に尋ねてみても、一人も知っている人がいない。うろうろしているところへ、女中の青青が東からやつてきたので、許宣はそれを見て、急いで「もしもし、あなたの家はどこにありますか？ 傘を取りにきたのですが」と聞いた。青青は「旦那さま、私についてきてください」と言つて許宣を引つ張つていき、どれほども行かないうちに「ここです」と言つた。許宣が見るとそこは大きな建

物で、向かいにあるのは秀王の邸宅である。青青は門に入り、「旦那さま、どうぞ中にお座りください」と言つた。許宣がそれに従つて客間に入り、青青が中に向かつて小さな声で「奥様、許さまがお入りいただいとお茶を差し上げなさい」と返してきた。許宣がなお入るのをためらっていると、青青は「どうしてお入りにならないのですか？」と促した。

許宣方走到裏面、只見兩邊是四扇暗榻子窓、中間掛着一幅青布簾。揭開簾兒入去、却是一個坐起、卓上放一盆虎鬚菖蒲。兩旁掛四幅名画、正中間掛一幅神像、香幾上擺着古銅香炉花瓶。白娘子迎出来、深深万福道「夜來遇雨、多蒙許官人忖付周全、感謝不尽」。許宣道「些微何足掛齒？」一面獻茶。茶罷、許宣便要起身。只見青兒早捧出菜蔬果品來留飲。許宣忙辭道「多謝娘子厚情、却不当取擾」。略飲了數杯、就起身道「天色將晚、要告辭了」。白娘子道「薄酌不敢苦留官人。但尊傘昨夜舍親又輒借去了、求再飲幾杯、即着人取來」。許宣道「天晚、等不得了」。白娘子道「既是官人等不得、這傘只得要求官人明日再來取了」。許宣道「使得、使得」。遂謝了出来。

許宣が中に入っていくと両側に四面の網戸窓があり、真ん中には青い帳が掛かっている。帳を上げて入ると居間があり、机の上には虎鬚菖蒲の鉢植えが置いてある。その両側には四幅の名画が掛けられ、真ん中には一幅の神像が掛かっており、さらに香机の上には古い銅の香炉花瓶が置かれている。白娘子は出てきて深々とおじぎをし、「昨夜は雨に遭つて、たいへんお世話になりました

た。お札のいたしようがありません」と言った。許宣が「大したことではありません」と言うと、白娘子は茶を勧めた。お茶が終ると、許宣は帰ろうとしたが、それを見ると青青は料理と果物を持ってきて、許宣を引き留めた。許宣は急いで辞退して、「お心遣いありがとうございます。しかしこれ以上ご迷惑をおかけできません」と言い、酒を数杯飲むとすぐに身を起こして「もう運くなりました。おいとましなければなりません」と言った。白娘子は「粗酒ではこれ以上お引き留めできませんね。ただ、傘は昨夜、親戚が借りていってしまいました。もう何杯かお飲みください。すぐ取りに行かせます」と言ったが、許宣は「もう遅いからです、それまで待てません」と言った。白娘子が「お待ちいたさないのですしたら、明日また取りにきていただかなければなりません」と言うと、許宣は「よろしいですよ」と言い、札を述べた。

到了次日、在店中略做做生意、便心痒難熬、只託故有事、却悄悄地走到白娘子家來討傘。白娘子見他來早、又備酒留飲。許宣道「為一把破傘、怎敢屢擾？」白娘子道「飲酒飲情、原不為傘。不妨飲一杯、還有話說。許宣喫了數杯、因問道「不知娘子有何話說？」白娘子見問、又斟了一杯酒、親自送到許宣面前、笑嘻嘻說道「官人在上、真人面前不敢說假話。奴家自亡故了丈夫、一身無主、想必与官人有宿緣。前日舟中一見、彼此便覺多情。官人若果錯愛、何不尋個良媒、說成了百年姻眷？」許宣聽了、滿心歡喜、却想起在李將仕家做生意、居停不穩便、怎生娶親、因此沈吟未答。白娘子見不回答、

因又說道「官人有話、不妨直說。何故不回答語？」許宣方說道「蒙娘子高情、感激不尽。只恨此身為人營運、自慚窘迫。仔細尋思、實難從命」。白娘子道「官人若必不願為婚、便難勉強。若為這些、我囊中自有余財、不消慮得」。便叫道「青兒、你去取些銀子來」。青兒忙走到後房中去、取出一個封兒、遞与白娘子。白娘子接了、復遞与許宣道「這一封、你且權拿去用。若要時、不妨再來取」。許宣雙手接了、打開一看、却是五十兩一個元宝、滿面歡喜、便落在袖中、对白娘子說道「打点停當、再來奉復」。遂起身作別。青兒又取出傘來、還了許宣。

次の日になると、店で仕事をしながらも心がうずうずして我慢できず、用事があるということをお実にして、またこっそりと白娘子の家へ傘を取りに行つた。白娘子は彼が来たのを見るや、また酒を用意して飲ませた。許宣が「ただの傘のために、こんなに迷惑をおかけするわけには参りません」と言うと、白娘子は「酒を飲むのは情を飲むことであり、傘のためではありません。どうぞお飲みください。まだお話があります」と言う。許宣が何杯か飲んで、「お話というのは何ですか」と問うと、白娘子はまた一杯酒を注ぎ、自ら許宣の前へ持つて行き、にこにこ笑いながら言うには、「旦那さま、仙人の前では嘘をつけないと申します。私は夫を亡くしてから一人の身です。きっと旦那さまとは前世からのご縁があったのだと思います。船の中でお会いしたときから、私たちは互いに情を感じたではありませんか。もし私への愛情があたりでしたら、よい仲人を見つけて、百年の契りを結びましょう」ということである。許宣はそれを聞いて喜びでい



っぱいになったが、一方で、李将仕の家で仕事をし、(李募事の家に)寄寓しているため落ち着かないのに、どうしてこのような身で妻を娶ることができようかと思ひ、考え込んでしまつて返事をしない。白娘子は返事がないのを見て、「何かお話があるのでしたら、はつきりおっしゃってください。どうしてお返事をくださいらないのですか」と言つた。許宣が「あなたにそのように想つていただいで感激に堪えません。ただ恨めしいことに私は人に使われている身で、お金がありません。ですからよく考えてみると、お言葉には従ひがたいのです」と答えると、白娘子は「旦那さまがもし結婚なさりたくないのですしたら無理強いはできませんでしたが、そのようなことなら、私には多少財産がありますからご心配は無用です」と言い、「青青、少しお金を取つておいで」と呼びかけた。青青はすぐに裏手の部屋へ行き、一封の包みを取り出し、白娘子に手渡した。白娘子は受け取つて許宣に渡し、「どうぞこれをとりあえずお持ちになつてください。もしご入用なときはまた取りにおいでください」と言つた。許宣はそれを両手で受け取り、開けてみると五十両の元宝であつた。満面に喜びの色を湛え、袖の中に入れ、白娘子に向かつて「それでは結婚の準備が整いましたらまたお話を参ります」と言つて辞去した。そして青青が傘を持つてきて、許宣に返した。

許宣一徑到家、先将銀子放好、又将傘還了人、方纔睡了。次日早起、自取了些碎銀子、買了些鷄鵝魚肉之類、並果品回來。又買了一樽好酒、請姐夫与姐姐同喫。李募事聽見男子買酒請他、倒喫了一驚、

因問道「今日為何要你壞鈔？」許宣道「有事要求姐夫姐姐作主」。李募事道「既有事、何不說明？」許宣道「且喫了三杯着」。大家依序坐定、喫了數杯、李募事再三又問、許宣方說道「愚舅蒙姐夫、姐姐照管成人、感謝不尽。但今有一頭親事、与愚舅甚是相宜。已有口風、不消十分費力。但我上無父母、要求姐夫姐姐与我玉成其事」。李募事夫妻聽了、只道要他出財禮、便淡淡的答应道「婚姻大事、也須慢慢商量。今日且喫酒」。喫完酒、各自散去、竟不回帖。

許宣はまっすぐ家に帰るとまず銀子を片付け、次に傘を人に返し、そしてようやくやく眠つた。次の日早く起きていくらかの銀子を取り出し、鶏や鷺鳥、魚や果物を買つて帰つた。また、よい酒を一樽買い、姉夫婦に勧めた。李募事は義弟が酒をご馳走してくれろというので驚いて、「今日はどうしてそんなに金を遣うのかね」と聞いた。すると許宣が「お二人にお願いしたいことがあるのです」と言うので、李募事が「何かあつたのなら言えはいいじゃないか」と言うと、許宣は「まず三杯飲んでください」と言つた。そこで皆、順に従つて座り、数杯飲んだ。李募事が再三尋ねるので、許宣は「私はお義兄さんとお姉さんのおかげで成長できまして、たいへん感謝しております。今、私にぴつたり縁談があります。すでに話はついておりますので、何も面倒なことはありません。ただ、私には両親がいませんので、お二人にはこのことが上手くいくよう、取り計らつていただきたいのです」と言つた。李募事夫妻はそれを聞いて、自分たちに結納の金品を出させようとしてゐるのだと思ひ、淡々と「結婚は大切なことだ。じつくり相談した方がいいだろう。今日はとりあえず酒を飲もう」と言い、

飲み終わると各自ばらばらになって、それきりとなつてしまつた。

過了三兩日、許宣等不得、因催姐姐道「前日説的話、姐姐曾与姐夫商量麼？」姐姐道「不曾」。許宣道「為何不商量？」姐姐道「連日姐夫有事心焦、我不好問他」。許宣道「我晓得姐姐不上緊的意思了、想是你怕我累姐夫出錢了」。因在袖中取出那大錠銀子來、遞与姐姐道「我自育財札、只要姐夫做個主兒」。姐姐看見銀子、笑說道「原來你在叔叔舖裏做生意、也賺得這些私房、可知娶老婆哩。我且取在此、待你姐夫回時、我替你說就是了」。過一會、李募事回家、妻子即將許宣的銀子遞与丈夫看道「我兄弟要娶親、原來銀子自有、只要你我做個主兒、須替他速速行之」。李募事接了銀子、在手中翻來不覆去、細看那上面鑿的字号、忽大叫道「不好了！我全家的性命都要被這錠銀子害了！」妻子道「活見鬼！不過一錠銀子、有甚利害？」李募事道「你那裏知道、現今邵大尉庫內封記鎖押都不動、竟不見了五十錠大銀、正着落臨安府捉賊、十分緊急。臨安府正沒尋頭路、出榜緝捕、写着字号錠數、捉獲者賞銀五十兩、知情不首及窩藏正賊者、全家免刃速充軍。這銀子与榜上字号相同、若隱匿不報、日後被人出首、坐罪不小」。妻子聽了、只嚇得咯抖抖的發戰道「不知他還是借的、還是偷的。却怎生区处？」李募事道「我那管他是借的、是偷的、他自作自受、不要害我一家」。因拿了這錠銀子、竟到臨安府出首。

二三日経つと許宣は待ちきれなくなり、姉を促して「先日の話ですが、義兄さんと相談してくれましたか？」と聞いた。姉が「まだです」と答えると、「どうして相談してくれないのですか」

と許宣は言った。姉が「夫は毎日いろんなことがあつていろいろしているので、私から言い出しにくいのです」と答えると、許宣は「姉さんがさつさとしてくれない理由はわかつていますよ。私が義兄さんにお金を出させようと思つていゝと、姉に手渡しよう」と言い、袖の中から大きな銀子を取り出すと、姉に手渡して「結納のお金ならあります。義兄さんにはただ世話人にさえなつてもらえればいいのです」と言った。姉はその銀子を見て笑いながら「お前はおじさんの店で仕事をしながらへそくりを貯めていたから、道理でそれで結婚したくなつたんだね。そのお金はひとまず私が預かつて、お義兄さんが帰つてきたら私から言つておくよ」と言った。少し経つて李募事が帰つてくると、妻はすぐに許宣の金を夫に手渡して、「弟が結婚したいというのはお金を自分で用意していたからで、私たちはただ世話人になればいいのです。早く話を進めてあげましょう」と言った。李募事は銀を受け取り、手の中でひっくり返しながらか細かく上に刻まれている番号を見ると、突然「いかん！この金のせいで俺たちはみんな殺されてしまうぞ！」と叫んだ。妻は「そんなまさか！たかが銀子一錠に何があるつていうの？」と聞いた。李募事は「お前は知らないだろうが、最近邵大尉が庫の中に鍵をかけて封印しておいた五十兩の大銀がなくなり、大急ぎで臨安府に命じて盗人捕えさせようとしているもの、臨安府も手がかりがないので、銀の番号と錠数を記した告示を出して、犯人を捕えた者には銀五十兩を与え、事情を知つていて賊を匿つた者はその一家を国境に流し、兵役につかせるとしている。この銀子の番号は掲示されているも

のと同じだ。もしこのまま知らせずについて、後々誰かが訴え出たら罪は軽くないぞ」と言った。妻は聞いて驚き震えて、「彼が借りてきたのか盗んできたのかは分からないでしょう。いったいどうすればいいの？」と言ったが、李募事は「借りたにしろ盗んだにしろ彼は自業自得だが、俺たち一家を巻き添えにされてはたまらない」と言つて、その銀子を持つて臨安府へ訴え出た。

臨安府韓大尹見銀子は真、忙差緝捕捉拿正賊許宣。不多時、拿到許宣当堂、韓大尹喝問道「邵大尉庫中不動封鎖、不見了大銀五十錠、現有李募事出首一錠在此、称是你的。你既有此一錠、那四十九錠却在何処？ 你不動封鎖、能偷庫銀、定是妖人了。可快快招来！」因一面分付卓快備猪狗血、重刑伺候。許宣見為銀子起、忙奔道「小的不是妖人、待小的直説」。便将舟中遇着白娘子、並借傘、討傘、以及留酒、講親、借銀子之事、細細説了一遍。韓大尹道「這白娘子是個甚麼様人？ 現住何処？」許宣道「他説是白三班白殿直的妹子、現住在薦橋双茶坊巷口、秀王墻對門、黑樓子高坡兒内」。

臨安府の韓大尹は銀子が本物であるのを見て、急いで犯人の許宣を捕えるための役人を差し向けた。すぐに許宣が法廷に連れて来られると、韓大尹は大声で「邵大尉の庫の中に封印しておいたにもかかわらず紛失してしまつた大銀五十錠だが、今、李募事がそのうちの二錠を持って訴え出て、お前のものだと云つている。

お前が一錠を持っていた以上（残りもお前が持っているのだから）、残りの四十九錠はどこにあるのか？ 封印してあつた庫の中の銀子を盗み出すことができたからには、お前はさだめし妖術

使いなのであろう。早く白状いたせ！」と言つて、役人に言いつけて豚と犬の血を用意させ、重刑を課せうとした。許宣はあの銀子のことを言つているのだということが分かり、慌てて「私は妖術使いではありません。話を聞いてください」と弁解し、船の中で白娘子と出会つたこと、傘の貸し借りをしたこと、酒を飲んだこと、婚約したこと、銀子を借りたことなどを一通り細かく話した。韓大尹が「その白娘子とはいかなる者で、どこに住んでおるのか」と尋ねたので、許宣は「彼女が言うには殿直の白三班的妹だということ、現在は薦橋の双茶坊巷口、秀王のお屋敷の向かいの高みにある、黒塗りの家に住んでおります」と答えた。

韓大尹即差捕人何立、押着許宣、去双茶坊巷口捉拿犯婦白氏來聽審。何立押着許宣、又帶了一千做工的。徑到黑樓子前、一看時、却是久無人住的一間冷屋、随拘地方並左右隣來問、俱回称道「此係毛巡檢家的旧屋。五六年前、一家都瘟疫死尽了。青天白日、常有鬼出來買東西。誰敢還在裏頭住？ 且這地方、並無姓白的娘子」。何立因問許宣道「你莫要認錯了、不是這裏？」許宣此時看見這個光景、也驚得呆了道「分明是這裏。纔隔得三五日、怎便如此荒涼？」何立道「既是這裏、只得打開門進去」。因叫地方動手、將門打開、一齊擁了入去。只見内中冷陰陰、寒森森、並無一個人影。大家一層一層直開了入去、並無一痕踪跡。直開到最後一層大樓上、方遠遠望見一個如花似玉、穿白的婦人、座在一張床上。衆人看見、不知是人鬼、便都立住脚。独何立是公差、只得高声叫道「娘子想是白氏了？ 府中韓大爺有牌票在此、要請你去与許宣對甚麼銀子的公事哩」。那婦

人動も不動、声也不敢。何立没奈何、只得大着胆子、擁衆上前。將走到面前、只聽得一声響亮、就似晴天打一個霹靂、衆人都驚倒了。響定、再近床邊一看、只見明晃晃一堆大銀子、却不見了婦人。及点点銀數、恰正是四十九錠。

韓大尹はすぐに、白婦人を呼び寄せて尋問するため、許宣を押し立てて双茶坊巷口に向かうよう捕縛吏の何立に命じたので、何立は許宣を押し立て、多くの捕吏を伴ってそこに向かった。黒塗りの樓の前に着くと、一目見てここは長い間人の住んでいない家だと感じたため、地保（地方の役人）と近所の者を連れてきて尋ねてみることにした。すると皆、「ここは毛巡檢の旧屋です。五六年前、一家は皆疫病で死んでしまいました。晴れた昼間には、いつも亡霊が買物を出てきます。誰もこんな所に住もうとはしません。また、このあたりに白という姓の女性はいません」と答えた。何立は「間違いいはないのか？　ここではないだろう」と聞いたが、許宣はその光景を見て驚きあきれながら「確かにここです。まだ何日も経っていないのに、どうしてこんなに荒れているのだろう」と言った。何立は「ここだというなら、門を開けて入ってみるしかあるまい」と言つて地保に門を開けさせ、一斉に中に入つていった。中を見ると冷え冷えとしていて、人影ひとつない。皆は一階ずつ確認していったが、何の痕跡もない。最後の一階に入ると、遠くに花や玉のように美しい一人の女が寝台の上に座っているのが見えたが、皆はそれを見て人が幽霊か分らず、立ちすくんでいた。ただ何立だけは公式の役人であるので、大きな声で「白氏でいらつしやいますね。府中の韓大尹の命令書

があります。銀子のことについて（許宣の供述を）確かめたく思いますので、許宣と一緒においでいただきたい」と叫ばざるを得なかった。婦人は身じろぎひとつせず、声も出さない。何立はしかたなく、衆を待んで前に進み出た。そして婦人の前に立とうかというとき、晴天の霹靂のような音がひとつ響いたので、皆はひどく驚いた。音が静まつて寝台の方を見ると、ただきらきらと光る一山の銀子があるだけで婦人は見えなくなつていた。銀子を数えてみると、ちょうど四十九錠あつた。

何立遂叫衆人將銀子扛到臨安府堂上、一一交明。又將所見之事、細細稟上。韓大尹聽了道「這看起來、自是妖人作祟、与衆人無干。地方隣里、尽無罪寧家。許宣不合私相授受、發配牢城營。銀子如數交還邵大尉。請邵大尉給賞五十兩与李募事」。一件方纔完了。惟李募事因出首許宣、得了賞銀五十兩、又見許宣因我出首、發配牢城、心下甚是不安、即將給賞銀子尽付許宣作盤費。又叫李將仕与了他兩封書、一封与押司范院長、一封与吉利橋下開客店的王主人。

何立は皆に銀子を臨安府まで運ばせてすべてを納め、見たことを細かく報告した。韓大尹はそれを聞いて「どうやらこれは妖人の仕業で、他の者には関係ないようだ。地保と近所の者たちは無罪だから帰してやれ。許宣はこつそりと金銭の授受をすべきではなかったから、牢城營に流そう。銀子はそのまま邵大尉にお返しする。邵大尉には懸賞の五十兩を李募事に与えるよう頼んでおこう」と言つた。これで一件落着である。ただ、許宣を訴えて五十兩を手に入れた李募事は、自分が訴えたために許宣が牢城に流

されると知つてはなはだ心苦しく思い、懸賞の銀子をすべて旅費として許宣に渡し、また、李將仕に頼んで二通の手紙書いてもらった。一通は押司の范院長、もう一通は吉利橋のたもとで旅館を営んでいる王主人宛であつた。

許宣痛哭了一场、辞別姐夫・姐姐、便同解人搭船到蘇州牢城管來。一到了、就将二書投見范院長並王主人。虧二人出力、与他上下使了錢、討了回文与解人而去。許宣毫不喫苦、就在王主人楼上歇宿、終日独坐無聊、甚是悶人。正是

独上高楼望故鄉 愁看斜日照紗窓

自憐本是真誠士 誰料相逢狐媚娘

白白不知婦甚妬 青青豈識在何方

隻身孤影流異地 回首家園寸斷腸

許宣はひとしきり痛哭すると姉夫婦に別れを告げ、護送の役人とともに船に乗り、蘇州の牢城管に向かい、到着するとすぐ、二通の手紙を范院長と王主人に送つた。二人は尽力して、役所の上下に金を使つて返書をもらい受け、それを役人に渡して彼らを帰した。許宣は少しも苦しい思いをすることなく、王主人の旅館の二階で、一日中ひとりで退屈に過ごしていた。まさに

一人高樓に上つて故郷を望み 夕陽の照らす紗窓を愁い見る  
自分は誠実な男と思つていたが まさか妖女にめぐり逢うとは

白娘子はどこに帰つていったのか 青青はどこにいるのだからか

单身この地に流れ来て 故郷の方を眺めれば私の心は千々に乱れる

許宣在蘇半載、甚是寂寞。忽一日、王主人進來、对他說道「外面有一乘轎子、坐着一位小娘子、又帶着一個丫鬢尋你」。許宣聽了喫驚、暗想道「誰來尋我？」慌忙走到門前來看、不期恰正是白娘子与青青。一時見了、不勝氣苦、因跌着脚、連声叫道「死冤家、自被你盜了官銀、害我有屈無伸、当官喫了多少苦楚！今已到此田地、你又起來做甚？」白娘子道「小乙官人、不要錯怪了我。我今特來要与你分弁」。王主人見二人只管立在門前說長道短、恐人看見不雅、因說道「既是遠來、有話請裏面去說」。白娘子乘機便要入去、許宣忙攔住道「他是妖怪、不要放他進去！」王主人因將白娘子仔細看了兩眼、帶笑說道「世上那有這等一個妖怪？不可出口詆人、請進去不妨」。

許宣は蘇州で半年を過ごし、たいへん寂しい思いをしていた。ある日、王主人が入つてきて彼に「外に駕籠が来て、女性が一人乗っている。女の子を一人連れていて、お前を探しているよ」と言つた。許宣はそれを聞いて驚き、「誰が尋ねてきたのだろう」と思った。急いで玄関まで行つてみると、思いがけないことにそれは白娘子と青青であつた。見た途端、腹が立つて我慢できなくなり、地団太を踏みながら続けざまに「こいつめ！ お前が役所の金を盗んでから俺は濡れ衣を着せられて、役所でひどい目に遭わされたんだ！ 今日またこんなところまで何をしに来たんだ！」と叫んだ。白娘子は「旦那さま、私を責めないでください。

私は今日、わざわざ弁解のために参ったのです」と言った。王主人は二人がいつまでも門の前であれこれ話しているのを見て、人がそれをみつともないことだと思ふのを心配して、「遠くからいらつしやつたのですからどうぞ中でお話ください」と言った。白娘子がその機に乗じて入ろうとすると、許宣は慌てて立ちあがって「彼女は妖怪です。入れてはいけません」と言った。王主人は白娘子をじっくり見て、「この世のどこにこんな妖怪がいるかね。そんなに人を罵つてはいけないよ。どうぞ構わずお入りください」と言った。

白娘子進到裏面、先与主人媽媽見過、然後对許宣說道「奴家既以身子許了官人、就是我的夫主了。終不成反來遭害官人麼？就是付銀子与官人、也是為好、誰知有禍？若說銀子來歷不明、罪皆座于先夫。奴家一婦人、如何得知？恐官人錯埋怨、故特來与官人弁明白了。我去也甘心」。許宣道「這都罷了、只是差人來捉時、明明見你坐在床上、為何響了一声就不見了？豈不是個妖怪？」白娘子笑道「那一声響、是青青用毛竹片刷板壁、弄怪嚇衆人。衆人認做怪、大家呆了半響、故奴家往床後遁去。衆人既害怕、不敢搜求、見了銀子、又以銀子為重去了。故奴家得脱身、躲在華藏寺前姨娘家裏。復打聽得你發配在此、故帶了些盤纏來看你、並討你婚嫁的信息。不期你疑我是妖怪、我只得去了」。遂立起身來要走。

白娘子は中に入ると、まずおかみさんに挨拶し、次に許宣に向かつて「私はすでにこの身を旦那さまに許しました。つまり旦那さまはもう私の夫です。それなのに、どうして私が旦那さまを陥

れるようなことがありましようか。お金をお渡ししたのはよかれと思つてのこと。災いをもたらずものであるなどとは思つてもみませんでした。あの銀子のいわれがはっきりしないことについては、その罪はすべて私の前の夫にあります。私のようなただの女にどうしてそのようなことがわかりましようか。おそらく旦那さまが誤解して私を恨んでいると思ひましたので、私は申し開きをするためにここまで来たのです。納得さえしていただければ、私は帰つても満足です」と言った。許宣は「そのことはもうたくさんだ。ただ、役人が捕えに来たとき、お前は確かに寝台の上にいたのに、どうして音が鳴り響くともに見えなくなったのだ。これでも妖怪ではないと言ふのか」と言った。白娘子は笑つて「あの音は青青が孟宗竹で壁を叩いて、皆を驚かせたのです。あの人は妖怪の仕業だと思つてしばらくぼんやりしてしまいましたので、私は寝台の後ろに隠れました。皆はすっかり恐れてしまったのでそれ以上私を探そうとはせず、銀子を見つけると、私よりもそちらの方を重視して行つてしまいました。そこで私は抜け出して、華藏寺前の叔母の家に身を隠したのです。あなたがここに流されたと聞き、わずかな旅費を持つてやつて来て、また夫婦になろうと思つていたのですが、まさか妖怪に疑われるとは思つてもみませんでした。私はもう帰るしかありません」と言つて立ち去ろうとした。

主人媽媽忙留下道「既偕遠來了、就要去、也在舍下權住幾日」。白娘子尚未肯、只見青青道「既是主人家好意再三勸留、娘子且住兩

日再商量。況当日原許過嫁小乙官人的、今日也難硬絶」。白娘子接口道「羞殺人！終不成奴家没人要、定捱在此！」主人媽媽道「既然当初已曾許下、誰敢翻悔？」須選個好日子、就在此成就了百年姻眷為妙。

宿のおかみは引きとめて、「遠くからいらつしやつたのですから、お帰りになるにしても、数日ご逗留なさってください」と言った。白娘子は頷かなかつたが、青青が「ご主人たちがご好意でこれほど勤めてくださるのですから、お嬢さまはひとまず二日ほどお泊りになって、また話し合われてはいかがですか。もともと旦那さまのところにお嫁に行かれるつもりでしたのに、今日のお誘いをお断りするのはいかがなものでしょうか」と言うのを聞くと、「ああ恥ずかしい！どうせ私は誰からも捨てられたんじゃないの。それなのにここにいれば、きつとつらい目に遭うに違いないわ！」と言った。おかみさんは「もともと結婚の契りを交わしたのであれば、誰がその話を反故にするのですか。よい日を選んで、ここで百年の契りを結ぶのがよいでしょう」と言った。

許宣初已認真是妖是怪、今被他花言巧語、弄得乾乾淨淨、竟全然不疑了。又見他標標致致、殊覺動心、借主人媽媽之勸、便早欣欣然樂從了做親之議。白娘子囊中充足、彼此喜歡。到了做親之後、白娘子做放出迷人的手段、弄得個許宣昏昏迷迷、如遇神仙、恨相見之晚。

許宣はじめこそ妖怪だと思っていたが、今は彼女の巧みな言葉による明快な弁解を聞いて、まったく疑わなくなりました。そして彼女が非常に美しいのを見て心が動き、さらに王主人

のおかみさんの勧めもあったので、すっかり喜んで結婚することとなった。白娘子の財産は十分であったので互いに喜んだ。さらに、結婚した後、白娘子はその色香によって許宣をまるで神仙にでも出逢ったかのようにとろけさせてしまったので、許宣はこうなるのが遅かったことを恨んだ。

【附記】資料の閲覧・利用にあたりご高配を賜った首都図書館古籍部の方々に感謝申し上げます。また、本稿執筆にあたっては上田望氏と徐文輝氏のご教示を得ました。ここに記して謝意を示します。

(注)

(1) 長澤規矩也「日本文学に影響を及ぼした支那小説―江戸時代を主として―」(『長澤規矩也著作集』第五卷、汲古書院、昭和60年2月。初出は昭和10年11月)、後藤丹治「中国の典籍と月物語」(『国語国文』21巻11号、昭和27年12月)。

山口剛「読本の発生―庭鐘と秋成との関係―」(『山口剛著作集』第二巻、中央公論社、昭和47年5月。初出は大正15年11月)。

(2) これを最初に指摘したのは曲亭馬琴の『異聞雜稿』である。  
(3) 麻生磯次「江戸文学と中国文学」(三省堂、昭和21年5月)、後藤丹治「中国の典籍と月物語」(前掲)などに指摘がある。

(4) 中国古典文学大系「剪燈新話・余話 西湖佳話 棠陰比事」(平凡社)に「雷峰怪蹟」は翻訳されていない。また、藤井乙男「蛇性の姪」について(『近世小説研究』、秋田屋、昭和22年9月。初出は大正10年12月〜11年1月)における「雷峰怪蹟」

の紹介は、ストーリーを丁寧<sup>ていねい</sup>に記したものであつて逐語訳ではないし、『怪談全集 歴史篇』(改造社、昭和3年7月)所収の田中貢太郎訳は文芸的脚色が少なからずなされているため、研究には利用しにくい。ちなみに「白娘子永鎮雷峰塔」の日本語訳は、松枝茂夫氏の手になるもの(中国古典文学大系『宋・元・明通俗小説選』所収)や、中村博保・雷定平両氏によるもの(静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇) 37・38号所収)などがある。

(5) 小川陽一『三言二拍本事論考集成』(新典社、昭和56年11月)。  
(6) 『中国古代小説百科全書』(中国大百科全書出版社、一九九八年十月)。

(7) 『中国通俗小説総目提要』(中国文联出版公司、一九九〇年二月)、『中国古代小説総目提要』(人民文学出版社、二〇〇五年十二月)など。

(8) 「排行」は同族中の同世代間における長幼の順序のことだが、「小乙」については、若い男性の中で最年長者とする説(『漢語大詞典』など)や、兄弟の順序の二番目とする説(『中国語大辞典』など)がある。ここではひとまず、「若者」と訳しておいた。

(9) 底本「幕事官」。以下、すべて「募事官」に改める。

(10) 「白娘子永鎮雷峰塔」には、許宣が寺に行く前日、寺の僧が許宣の家にやってきて、もうすぐ清明節だから先祖の供養をするようにと言う描写がある。その際、僧は「貧僧は保叔塔寺内僧、前日已送饅頭、並卷子在宅上」と言っており、この場面に

おける「饅頭」はこのことを指していると思われるが、「雷峰怪蹟」では僧のこの台詞が省略されているため、わかりにくくなっている。

(11) 「掇」は底本のままだが、意味が通りにくい。「躲」や「縮」の意と解釈して訳した。

(12) 清代における各州県の官署の下級役人を「三班」というが、ここにおける「三班」がその意味かどうか明らかでない。本稿では「白三班」とそのまま訳しておく。ちなみに、「白娘子永鎮雷峰塔」の松枝訳は「あたたくしは宮中の殿直をつとめております白侍従の妹でございます」、中村・雷訳は「私は殿直をつとめます白三班の妹で」となっている。また、「雷峰怪蹟」の藤井訳は「妾は白三班<sup>（白三班）</sup>白直殿の妹で」、田中訳は「私の家は白三班で、私は白直殿の妹で」とする。

(13) 底本「直殿」。以下、すべて「殿直」に改める。「殿直」は宮廷に仕える武官のこと。

(14) 「白娘子永鎮雷峰塔」には「三橋街」とある。

(15) 心が浮き立って落ち着かない様を表している。原文の「心猿意馬」は「意馬心猿」に同じで、欲情の抑えられない様子をいう。

(16) 底本「到」。

(17) 底本「首出」。

(18) 底本「番悔」。